

---

# 響良牙が幻想入り(らんま 1 / 2 × 東方Project作品)

溺死

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

響良牙が幻想入り（らんま1/2×東方Project作品）

### 【Nコード】

N6884N

### 【作者名】

溺死

### 【あらすじ】

良牙は何時ものように東京を目指していた。

しかしひょんなことから、良牙はある場所で執事として働くことになった。……そこは紅魔館と呼ばれる、紅い悪魔の住む洋館だった。

りょうが1/2 熱闘編(前書き)

これは『良牙が幻想入りしたら』なクロスオーバーSSです。

クロスオーバーが無理。

良牙が東方側のキャラに勝つ。

等の描写が、受け入れられない場合はこの作品はオススメ出来ません。

また、別サイトSS投稿掲示板のチラシ裏にて掲載している同作の作者・溺死であります。

麗らかな春の日差しの中、良牙はひとり、大きなリュックを背負い、ひたすら風林館高校を目指して山道を歩いていった。

彼が風林館高校を目的にする理由、それはもちろん、あかねに会うためである。

愛しいあかねさん、俺はあなたのためだったら命だって投げ出すことができる。

だというのに……、あかねさんの隣にはいつも乱馬（宿敵）がいるのだ。

想い人とライバルの仲睦まじい光景を脳裏に浮かべた途端、ふつふつと沸き起こる熱い何かを良牙は覚えた。

Pちゃんとしても、響良牙としても、彼女は何時も自分に優しく接してくれる。どこにも悪いところなんてないというのに……。可愛くないだとか、ずん胴だとか、乱馬はいつもあかねさんに対して失礼なことを言っている。

もちろん怒ったあかねさんが乱馬をぶっ飛ばすのもいつものことである。しかし、彼女の表情が生き生きとしているのはそうやって乱馬と一緒に居る時だ。

自分では引き出すことが出来ない顔を、乱馬は引き出すことができる……。そう考えた途端、良牙は自分の脚がズシリと重たくなってきた気がした。

ここ最近、物を持って重さを感じたことはなかった。だが、中身は別である。乱馬とあかねがいちゃつく姿なんて想像しようものなら、良牙の心は海より深い負の重みを感じてしまう。

「くそっ、乱馬め！」

「ひゃあつ、な、わ、わわわ私は寝てませんよ咲夜さん!？」

「?」

女の驚いた声が耳に入り、良牙は声のしたほうへ視線を向けた。右手に何か触れたような気がしたが、多分、はずみで蠅か蚊を叩いたのだろう。

そう片付けながら良牙が見たのは、薄い緑色のチャイナ服を着こなし、同じ色の帽子を被った赤い髪の女だった。

何やら慌てているがちょうど良い、この時間帯ならあかねさんは多分、学校に行っているはずだ。

「おい、ちよつと聞きたいんだが風林館高校へは……へ……ああああああ!」

良牙の掛けた声に気づき、目を合わせた瞬間、女は目を見開いて叫び声をあげた。

プルプルと何やら身体を震わして手を出し、顔を真っ青にさせた女は良牙を指差して告げた。

「へ、へへへ……塀が壊れてるううう!？」

「塀だと?」

女の言葉に、良牙は周囲を見回す。するとそこには煉瓦造りの紅い塀が辺り一帯にかけて立っていた。だが、何故か良牙の居る場所だけ隔たるものが無かった。

あるのは粉々に砕けた同じ紅い煉瓦の瓦礫だけである。多分、女が示しているのはこれだろう、瞬間的に良牙はそう察した。

そういえばさっき叫んだ時、何か右手を掠ったのは……。まさ

か、俺がこれをやったのだろうか？

「な、なんで！？ あの、その人、白と黒の服を着た奴がここに  
来ませんでしたか！」

慌てふためきながら、門の辺りに居た女は駆け寄ってそんなこと  
を良牙に尋ねてきた。

しかし、良牙にはこの女が誰のことを言っているかなど解るはず  
もない。

「いや、そんなものは見ていないぜ」そう答えると、女の顔は更に  
青くなり、何も隔たるものが無くなった先に建っている紅い洋館を  
見上げた。

そして、

「す、すみません咲夜さーん！」

そう叫ぶや、あつという間に走り去っていつてしまった。

「あつ、おい！」

まだ風林館高校への道を聞き出していないのに、良牙はそこでひ  
とり取り残されてしまう。

このまま中に入って誰かに話を聞きたいところだが、勝手に入る  
のは失礼な気がする。

それに、塀を壊してしまったのは自分かもしれないのだから、こ  
こはキチンと謝らなくてはいけない。

どうしたものか、そう良牙が悩んでいた時、

「あら・・・どうしたのかしらコレは」

塀の向こうから、先程の女とは違う声が良牙の耳に届いた。そち  
らへ視線を移すと鉄製の門が独特の音を立てて開き、そこから銀髪  
のメイドが姿を出した。

「ちょっと良いかしら？」良牙に気づいたメイドはそう尋ねながら歩み寄ってくる。だが、その表情は明らかに不機嫌な色をしており、額には青い筋がいくつか浮き出ている。

「あ、ああ」

「ここに赤い髪の間番が立っていないなかったかしら？」

「居たが、あんたとは入れ違いにあの中へ走っていったぜ」

「何があつたのよ……」

「ああ、これについてだが……すまん」

言動から察するにこいつはメイドでも偉い立場なのだろう。そう思った時、良牙の行動は早いものだった。

頭を下げ、謝罪してきたこと。その台詞の内容に聞き捨てならなかったメイドは、顔を引き攣らせながら良牙に説明を求めることにした。

「どういうこと？　もしかしてあなた中国に決闘でも挑んだのかしら？」

「中国？　いや、考え事しながら通り掛かった時、つい壊してしまつたんだ。悪いのは俺だ」

「はっ？」

良牙の言葉にメイドは訳が解らないといったふうな声を出し、やがて鋭い視線を良牙へと向けた。

彼女が納得するには説明の材料が不足しているらしい……。

「どこの馬の骨が解りませんが……この塀には館の偉大な魔法使いが幾重にも工夫をこらした魔法が掛けてあるわ。それを壊したのが人間であるあなただなんて、信じられると思うのかしら？」

腕を組み、見定めるかのような目でそう尋ねてきたメイドに良牙は頷くしかなかった。

魔法とかどうとか言っているからには、ここの館は普通ではないのだろう。

とりあえず塀を破壊したのが、自分であることを証明するため。良牙はとりあえず足元に落ちていた大きい紅煉瓦を拾い上げ、人差し指を立ててそれを突いた……。

「じつじつことだ」

「なっ!?!」

一瞬にして、手の中にあつた煉瓦は粉碎され、それを眺めていたメイドの顔は驚愕に染まった。

「これはあらゆる物に備わる爆砕のツボを押す土木工用の技だ。魔法だかマジックだか知らないが、この技の前で壊れないものは無いんだ」

「どつやらそのようね……」

話を信じてくれたのか、良牙から今使用した技についての解説を聞き。メイドはあらためて赤い瓦礫の山を見遣った。

「壊したことに關しては本当に済まないと思っっている。俺に出来る



「ことなら何でもするぜ」

改めてそう言うと、メイドは少し間を置いてから向き直り、良牙に告げた。

「なら、使用人としてしばらく働いて貰うわ。それで良いわよね？」

「構わない」

使用人……というからには掃除炊事洗濯をしなくてはいけない、しかし元々自分はひとりっこである。家事ぐらいはひととおり問題なく出来るはず。

どうやら話は丸く収まりそうだ。良牙は心の中で安堵した。

「なら、ついてきなさいな。お嬢様達に会わせるから」

「ああ」

メイドにそう言われ、良牙は彼女に続く形で塀の内側へ足を踏み入れた。厄介なことになったが、やってしまったことは仕方ない。しばらく働いて、ついでにあかねさんへの思いを紛らわそう。

そう考えながら、メイドに従うまま、良牙は広い玄関から館の中へ入っていった。

以前も何度か大きな家に入ったことが良牙にはあったのだが、この屋敷はこれまでと大きく違う点があることに良牙は気づいた。

それは、屋敷の外装内装全てが”紅”を基調にデザインされているのだ。

「悪趣味だな……本当にどんな奴が住んでいるかわかったもんじゃないぜ。っと、悪い」

これから雇われるのにこうゆうことを言うようではまずい。思い直した良牙は直ぐさま訂正しようとメイドに声をかけた。

しかし、そこは今の今まで歩いてきた紅い絨毯が敷き詰められていた廊下ではなく、さらにメイドはどこにも居なかった。

「あなたはだあれ？」

良牙が居たのは薄暗い部屋で、そして良牙の目の前には不思議そうに自分を見上げる少女が居たのであった。

・・・その頃、良牙を連れていたメイドはというと。

「そつえばまだお名前をお伺いしていませんでした……わ、ね」

良牙が居ないことによつやく気づいたところだった。

第一話（前書き）

良牙VSフラン 短いです。

## 第一話

少女の笑い声が部屋中に兒玉していた。

「あははははは、すごいよ良牙！ 三十分経っても壊れないなんて！」

そう言い、少女は喜びをあらわにする。彼女の周りから放たれる赤い光弾を、良牙は傘で防ぎながら逃げていた。

そして、安請け合いしてしまった自分を、良牙は激しく責めた。おかしい。俺はちゃんとあの銀髪のメイドの後に付いて廊下を歩いていたはずだ。

なのに気づいたら、見ず知らずの子供の部屋に居たなんて……。まったくだだっ広い屋敷だぜ！

考え事していた為に迷ってしまったことなどすっかり棚にあげ、良牙は呆れるように心の中でそう思った。だが、

「ほらほらー！」

今は少女との遊びに集中しなければならない。毒づき、目の前に現れる光弾の群れを回避し、良牙は傘で防ぎつつ後ずさっていく。

そもそも何故こうなったかは「暇つぶしに遊んで」と彼女から誘われたからであるが……。良牙としては正直、あのメイドと合流したかった。

しかし、こんな小さい子の頼みを邪険にするわけにもいかない。軽い気持ちで、そう、近所の子供と遊ぶ気持ちで良牙は応じた。

今にしてみれば甘かった。あらためて良牙はフランを見遣る。『私はフランドール・スカーレット。フランと呼んでね』そう名乗った少女は、見かけの愛らしさと相反した強さを、その身体に秘めて

いた。

こんな幼い子が、いったいどんな修行をこなしてきたんだろう。驚きと悔しさが混じった感情の中、そんな疑問が良牙の心に浮かんだ。

「もー、集中してよ！」

「っ!?!」

前から次々に迫りくる弾を避け続けていた良牙の元に、大きめの光がフランの手から放たれた。

傘を盾にするにしても動作が遅れてしまう距離だったが、意外にも良牙の頭は冷製に働くことができた。

「爆砕点穴！」

「うそ……」

素早く片手で弾を相殺し、良牙はフラン目掛けて飛び掛かる。

こうなったら接近して大人しくさせる他はないぜ。手の届く距離まで迫った良牙に、フランは驚きを隠せずに目を見開く。

「どうだ！ 弾幕とかいうやつは避けきつたぞ!?!」

赤い和傘を上げ、なるべく力を加減してフラン目掛けて振り下ろす良牙だったが、フランが微笑んだ途端、傘はガシリと何かに阻まれた。

「じゃ、こんどは良牙に合わせてあげる！」

狂気の光を放つ目で良牙を捉えながら、フランが手にしていたも

のは、ぐんにやりと湾曲した異様な黒槍だった。

何とも嬉しそうに微笑み、槍で赤い和傘を弾いたフランはそのまま良牙に襲い掛かった。

「ちっ」

それを瞬時に見抜き、身体を横にしたため、切り刻まれるには至らなかったものの。掠めただけで服は切り裂かれ、そこから良牙の肉体があらわになっていた。

だが、それで怯む良牙ではない。

「まだまだ!」

身体を戻す勢いで良牙はフランを殴り飛ばす。もちろん手加減はしてるから、痕は残らないだろう。女の子を殴ることに若干の抵抗があった為、良牙は自分の攻撃が入る度にフランを心配していた。しかし、

「すごいよ良牙……すごいすごいすごいすごいすごい、もっとアソボウヨ!」

「ぐわっ!」

どうやら心配は無用なようだ。

笑いながら戦線に復帰し、再び爪を繰り出してきたフランに良牙は避ける暇もなく直撃を受けてしまった。

しかし、そこでフランが止まることはなかった。

「えいつ!」

「ぐあああつ」

返す手で至近距離から光の弾を撃ち込み。槍で殴り、蹴りを入れる。といった攻撃を、怒涛の勢いで繰り広げ、フランは徐々に良牙を追い詰めていった。

奇しくも、パワーとスタミナが自慢である良牙とフランであるが見掛けで油断している今の良牙では、フランの相手にはならなかった。

「どうしたの？　こんなんじゃないよ良牙！」

フランは良牙に不満を言いながらも、手を緩めようとしなかった。また、先程の勢いのように良牙が力を見せてくれるだろうとを期待しているからだ。

しかし、

「っ……」

フランの槍が吸い込まれるように良牙の腹を深々と突いた。あまりの威力に、良牙はガクリと膝を付く。

その瞬間、今の今まで楽しそうにしていたフランは冷徹な表情となり、すぐさま思ったことを良牙にたたき付けた。

「なあんだ。良牙弱いね……」

「っ!?!?」

自分の頭上から、降り注いだフランの言葉は良牙の心を深く刺した。

よわ……い。子供に言われたから余計に響くのであるうか。

傘を手放し、ボロボロの床へと視線を落とした良牙の脳裏に、ま

たもや想い人と宿敵の姿が現れた。

『良牙くん……子供にまで勝てないんだ』

『あ、あかねさん！？』

『仕方ねえさ』

『乱馬！？』

肩を浮かし、ため息をつくようにそう言い、乱馬はあかねの肩に手を回した。

自分を見る二人の目は、哀れな者を見るような色をしていた。

『違う！ お、俺は……』

『何が違うってんだ、弱いブタ野郎』

『ら、乱馬貴様！？』

ギロリと睨みつけ、言うてはならないことを告げた乱馬に。良牙は焦りと憤りが混じった複雑な感情のまま、乱馬へ駆け出した。

言わせてなるものかよ！ しかし、そう思って伸ばした良牙の手はすり抜けるように空を切った。今、そこに居たはずの二人が居ないのだ。

ど、どこだ！？

『ブタ野郎ってどついつこと乱馬？』

『こつゆつことさ、あかね』



言い聞かせるように乱馬の声が頭に響いた瞬間、良牙は冷たい何かを浴びた。

そして、気付いた時。

良牙は乱馬とあかねを見上げているのだ。

『ぶ、ぶきっ!?!』

『そ、そんな……良牙くんがPちゃんだったなんて……今まで騙してたのね!?!』

『ぶき、ぶきぶきー!』

『もう言い訳は出来ないぜ良牙、あかねのことは俺に任せて。お前はさっさと旅に出な……じゃあな』

『最低な良牙くん、さようなら!』

『ぶ……ぶき……ぶきー!』

侮蔑の目を向け、次第に自分の元から遠退いていく二人に、良牙は蹄をあげて泣き叫んだ。

待ってくれ! これには理由があるんだ!

良牙はそう言いたかった。しかし、もう二人が戻ってくることはなかった。

暗雲で覆い尽くされ、悲哀に包まれた心のまま、良牙はゆっくりと立ちあがる。すると、フランは花が咲いたように笑顔を浮かべた。

「ふふ、やっと立った。ねえ、はやく続きし……」

しかし、そこに居たのは。光の無くなった目をした良牙だった。

何もない、心にぽっかりと穴が空いたような。ジッと虚空を見つめる良牙に、思わず自分を重ねたフランは言葉を詰まらせてしまう。そして、

「不幸だ……」

「え」

「……獅子咆哮弾」

小さく、そう良牙が呟いた直後、辺りを負の塊が襲った。重い、良牙の重い悲しみに押し潰され、何が何だか分からないままフランは意識を手放してしまう。

そして……落下する気は部屋を破壊した。

「居ましたよ咲夜さん……って、妹様が倒れてるっう!？」

「な、何ですって!」

聞き知ったばかりの者達の声を耳にしながら、良牙もまた、崩れ落ちるように床に倒れ込むのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6884n/>

---

響良牙が幻想入り(らんま1 / 2 × 東方Project作品)

2011年10月7日23時44分発行